◇童話◇

# 緋桃の精

—美知代—

おりゑの家の門邊に、年を經た緋桃の木がありました。花と言ひ枝ぶりと云ひ他所には珍しい木でありました。

或日ふと、領主が之を眺めて、是非に自分の邸に移し植ゑたいと、おりゑの父親に語りました。

大切な、可愛い緋桃の木であります。父親は全く嫌だったのですが、何分相手が領主なので、それも否み難く、遂々『承知いたしました。』

とお承合ひをしたのです。おりゑは蔭で之を聽いてゐました。どんなに歎き、どんなに惜しんだでせう、どうしても我慢が出來なくなって、領主の前に駆り出ました。



『領主様、どうぞ緋桃の事はお許し下さいませ。父も手離したくない緋桃の木。又私とは、私が生れたその日に芽を出しました深い因縁の緋桃なのです。その緋桃と別れます事は、私はどうあつても嫌でございます。緋桃を持つていらつしやるほどなら、りゑを切り捨てゝ下さいまし……。』

何と言ふ可憐な言葉でせう。流石に、領主の心は動きました。感じました。い

[redacted]

ぢらしく思ひました。大きく點付きながら

『承知いたした。りゐとやらに免じて緋桃の木はそのまゝにいたさう。』

おりゐは元より、父親も飛び上るほど悅びました。

さうして緋桃の木は再びおりゐの家の門邊に立つ事となつたのでした。

＊　＊　＊

『ブレッ！……』

おりゐは思はず悲鳴をあげました。



星明り！　使ひ戻りのおりゐの袖を捕へた無禮な憎い士が數人あつたのです。

おりゐは必死に退れようとしました。併しか弱い少女ではどうする事も出來ません。

＊　＊　＊　＊

折しも、風の如く來つた一人の士がありました。

無言のまゝ、彼れは獸のやうな士を四方に投げ飛ばしました。

『ありがたう存じます……』

おりゐは蘇生の思ひで禮を述べました

見れば、美しい匂やかな若士でありました。若士は禮の言葉を打消して、慇々おりゐの門邊まで送つて來ました。

『お名前を承はりたうございます。』

別れの際におりゐが言ひますと、若士は靜かに、袖から緋桃の花片を、ハラハラ夢のやうに散らしました。と共に、その姿はかき消す如く消えました。（完）